

ふくろうのつばやき

—間がないね—

真壁 伍郎

野の花文庫の柱に、一羽の張り子のふくろうが掛っています。めがねをかけたような大きな目と、ストンと伸びた体、これが全体、この文庫のあるじのわたしにとても似ているのだそうです。一〇年以上も前に、そんなコメントをつけて、児童文学作家のいぬいとみこさんがこれをわたしにプレゼントしてくださいました。ほんとうに似ているのかなと思いつつながら、ギリシャでは知恵の象徴でもあるし（これがドイツではなんと、醜さの象徴！）と、いくぶん満足して、それを文庫の柱に掛けておきます。

昨年、この同じようなふくろうを、ドイツの学校の見つけました。甥や姪たちが通っているフランクフルトのレッスン・ギムナジウムの、校庭に面したところに高だかと掛けていました。

「あのふくろうの意味知っている？」と姪に聞きましたが、分りません。わきから、この同じ学校を卒業した甥が、助太刀をしてくれました。

「知恵だよ。知恵の女神アテーナの鳥だ」

彼らは決して、醜さの象徴だなどは考えていませんでした。ほっとしました。そこであらためて、姪に、「あなたもいい知恵がほしかったら、あの鳥のところに行って、耳を澄ましてみるといいよ」とすすめておきました。ギリシャ、ラテンの古典を重視するこの学校で、彼女はラテン語で苦勞していました。

わたしも、時々、文庫のふくろうの側にいつて耳を傾けます。毎週土曜日の午後、雨の日も風の日も、そして吹雪の日にもせっせと通ってくる子どもたち。その子どもたちの様子をあのふくろうは一部始終見ているはずですよ。いや、昼は目がよく見えないとすれば、すばらしいといわれるふくろうの耳で、子どもたちの心のささやきまでもしっかり聴き取っているにちがいありません。また、文庫のおじさん、おばさんと名乗るわたしたち夫婦の子どもたちとのいささか滑稽な対応ぶりにも、彼女（ふくろうはドイツ語では女性）は、びっくりしていることでしょう。彼女はいつたい何を考え、なんといつているのか。

いつもではありませんが、時々あのふくろう、妙なことをつぶやいています。とっさになんのことだろうと判断に苦しむことがあります、それを長いこと心に暖めていると、はっとさせられることが多いのです。

そんなわけで、わたしはこのふくろうのつぶやきを、いくらでもご紹介しようと思います。ただ、知恵のあるふくろうですが、なにしろこれは夜の動物。白日のもとの理性や合理だけが強調される昨今の風潮のなかでは、ふくろうの知恵など、月の光の陰影のように定かではないとおおかたのひとには退けられるかもしれません。どこにも人工照明が行きわたり、ふくろうも住みにくくなりました。

でもさいいわい、子どもたちはまだこのふくろうが好きです。先日も「暗くすると、あのふくろう鳴くんだったさ」とわざと部屋を暗く閉めきって、子どもたちは息をこらしていました。そして、「ほんた、聞えたよ」とか、「うそだー」とかいいながら、ふくろうを見つめていました。

さて、ある日のこと、このふくろうがしきりにつぶやいているのを耳にしました。「間がないね、間がないね」といっています。

はてなんのことだろうと、わたしはしばらく考えました。そして、ようやく思いあたることができました。

いつか子どもたちにわたしはこんなことを聞いたことがあります。

「あなたたち、どこにいるときがいちばん楽しい？」
すると、すかさず、男の子がいました。

「うん、学校と家の間」

「うーん、そう」と、合いづちをうったものの、どうそれに言葉をついでよいか分かりません。

新潟市の郊外、新興住宅地にあるわたしの家の近くには、まだところどころ畑が残っています。学校の帰り道、子どもたちは、追っかけっこをしたり、なにかがやがや話合いながら、とても楽しそうに歩いています。畑のそばにしゃがみこんで、なにかいじったり、眺めたり

している子もいます。学校と家の間、ほんとうにその子のいったとおりです。学校での緊張から開放されて、子どもたちはとてもゆったりと自分の時間を楽しんでいるようです。ぶらぶらと歩いている子どもたちの様子に、つい自分の子どもの頃の姿を重ね合せて見てしまいます。

学校と家の間。何気ない言葉でしたが、あまりにも意味深長です。学校が楽しいともいわず、また家が楽しいともいいませんでした。その間が楽しいのです。

ふと、わたしたちの文庫の位置づけはどうかかと考えてしまいました。問だろうか、それとも学校のようなものだろうか。家庭文庫と名のからは、家に近いものだろうか。それにしても、あの子は家が楽しいともいいませんでした。それも気になることです。

できれば、わたしたちの文庫も学校と家の間の存在にしたい、そんな思いで、子どもたちの住む世界を見回すと、その間なるものがほとんどなくなっているのに気がかされます。

「おじさん、この文庫は塾じゃないよね」。学校で先生

がどれくらいの子どもが塾に通っているのかを調べたときのことなのでしょう。ある子どもがこんなことを聞いていました。

「あなたどう思う？」

「うん、塾じゃない。だって勉強してないし、おじさん、先生じゃないでしょう」

学校と家の間を少しでも埋め合わせようと、塾という学校がどんどん増えてゆきます。水泳でも楽しんでいるのかなと思うと、それもスイミング・スクールという学校だったりします。わたしたちの文庫には、幼稚園のときからずっと小学校六年生になるまで通いつづける子どもがけっこういます。ところが三、四年生くらいになると、学校の勉強が大変だからとさようならしてゆく子どもが毎年何人かいます。そんな子は「お母さんがこんどは塾へ行けっていうの」と、名残り惜しそうに去ってゆきます。

文庫の子どもたちは、みんな友だちどうしの口コミでやってきました。ところが、この文庫のことが新聞やテ

レビで紹介されると、それならわが子もと、母親の力に押し出されてくる子がたまにいます。でもそうした子どもは、まったく長続きしません。「あなたの好きな、面白そうな本を借りていきなさいよ」とわたしにいわれて、意気ようようと借りていった本に、母親が文句をいうらしいのです。返すときに子どもはほつりといいます、「もっと字がいっぱいある本を借りてきなさいだて」

子どもたちが楽しいと感じる「間」は、親や教師の圧力からいくらか開放された、息がつける間のことのようにです。教師の熱心、親の愛情が深ければ深いだけ、子どもたちとまともに向い合おうとします。勢いそのあいだの間が保てません。自分の熱心で子どもを動かす、場合によってはその熱心で子どもを変えようとしています。またそれが出来るのだと信じてしまいます。恐ろしいのは、むしろその反動です。意のままにならないと、あれでもかこれでもかといろいろなことをやって子どもを追いつめ、あげくの果てにその子は駄目な子だときめつけた

り、憎しみをもったりしてしまいます。

わたしたちが科学や学問とってきたものも実は、この間をすべてふさいでしまおうとするものでした。自然科学の分野はいうにおよばず、緻密な学問とは、隙間を許さない理論をもっていることを意味しました。そしてその理論が、技術を生み、技術は専門家を生みだしました。ですから、熱意ある専門家ほど、隙間を許せなくなってしまう。専門家だけではありません。教育の普及は、そうした理論を一般化します。いままで素人で済んだ誰かれまでが、そうした理論の実践家になってしまいます。

学校と家の間という、その家にもわたしはこうしてくだわらざるをえません。子どもにとって家庭までもが、あまり楽しいものでなくなってしまうのです。家庭教育が叫ばれば叫ばれるほど、母親たちは色をなして、子どもと向い合おうとします。教育のあれこれに神経を使い、子どものために間違いない対応をと考えます。いったい家庭教育などという言葉は、いつ誰がいい

だしたことなのでしょう。家庭教育に限りません。社会教育、そして最近では生涯教育までもがいわれていきます。

今までの教育の図式からいえば、教育には必ず教師がいました。そのままの形が家庭や、社会や、そして生涯にわたる人生にまで延長されたら、どこかにどうしても教師に当る人を置かなくてはなりません。わが子のことで熱心になる母親（父親もいるでしょうけど、それは稀）が、家での教師の姿をとり始めたのは、ほんのごく最近のことではないかと思えます。

「間違いだらけのことをしてきたけれども、子どもたちはみんなよく育ってくれた」

わたしたち七人の兄弟姉妹を育ててくれた、わたしの母はよくそんなことをいっていました。これはなにもわたしの母に限ったことではありません。たくさんの子どもを育てた母親たちの口からよく聞かれる言葉です。

親の養育の失敗にもかかわらず、子どもは育った。そのように語る親たちには、気負い立った教師や親にはな

い謙虚さをいつも感じさせられます。そのような人たちは、言葉をついでいいいます。

「みんなひとさまのお蔭でした」

間違いないという教育理論、確信をもって行われるあれこれの教育方法。これが結局は子どもを追いつめ、ついには教師や親をも焦りと絶望感に陥れる。どうみてもここには間がありません。

「エラーレ・フマーヌム・エスト」

(誤りは人間の常)

習いたてのラテン語のこの言葉を、ドイツの甥が大声でいいながら遊んでいたことを思い出します。親も教師も、そして子ども自身も、だれもが間違いながら成長し、大人になってゆく。人間をこのように受けいれるゆとりと間が、今のわたしたちにはなさすぎるようです。

育つ子には、育つ親がいる。これは確かです。楽しく、しかも熱心に本が読める子は、親もたいてい読書を楽しんでいます。そんなこともあって、文庫に子どもを

よこしているお母さんたちに、わたしの家で行っている大人の読書会にもよかったらどうぞとおすすめしました。すると、何人かのお母さんが来てくださいました。

お母さんも自分のための勉強をし、本を読もうとしている。これが子どもたちにはとても嬉しいのでしょうか。あるお母さんがいっておられました。「その日になると、子どもたちが夕ごはんの手伝いをしてくれます。後かたつけもちゃんとして、いってらっしゃいとわたしを送り出してくれます。よっぽど嬉しいんでしょうね」

母と子が深刻に向い合うのではなく、少し離れて共学の形をとる。そんなとき子どもは、自分の母親の姿になにか誇らしい気持を感じるようです。子どもも、向い合う息苦しさから、ちょっと開放されているのかもしれない。

レパノンの詩人、ハリール・ジブラインの『予言者』という詩の、結婚についてのところに、こうあります。

あなたがたは共に生まれ、永久（とわ）に共にある。

死の白い翼が二人の日々を散らすときも

その時もなお共にある。

そう、神の沈黙の記憶の中で共にあるのだ。

でも共にありながら、互いに隙間をおき、

二人の間に天の風を踊らせておきなさい。

あなたがた二人はたしかにいつまでも共にある。しかし、その共にあるそこに、スペースを置きなさいといいます。

But let there be spaces in your togetherness

結婚についての詩でありながら、ここには親子の関係、またわたしたちすべての人間関係にあてはまる真理が語られています。ではなぜ、スペースをおく必要があるのか。詩人は、さらにつづけていっています。

And let the winds of the heavens dance between you.

それは、天の風があなたがたの間を踊るためだと。

目に見えない天の風が、二人の魂の間を自由に踊り、二人をそれぞれ生かし、育てるといふのです。

さて、今わたしたちに欠けている最大のものは何か。

それは、天の風を信じる事が出来なくなったことだろうと思います。人と人との関係を線で結び、その間が近ければ近いほど、働きかける力の作用は大きいとわたしたちは考えます。現在の科学も技術もそれを支持します。ですから、二つのもの間には、えたいの知れない空間があつてはならないのです。でも、そこにはもう天の風が吹き、働きかける余地はありません。

最近、ユング心理学のことがしきりにいわれ、これに関心を寄せる人が多くなりました。今までの心理学とは一味違います。その一番大きなところは、ジブラインのいうスペースと天の風を重視していることではないかと思えます。原因結果の直線的な線引きにあけくれした学問に、間をおいて、そこに働く見えない力があることをこの心理学はいいいます。隙間をうめることが今までの学

問の態度であったのに対して、むしろ隙間を大切にしようとします。いや、見方によっては、隙間だらけの学問、隙間そのものの学問だといえるほどです。それなのに、人々はいま、このような学問を喜んで受け入れようとしています。それを学んで、息抜きができ、心と魂の自由な動きを喜ぶことができるからだろうと思います。

子どもと向い合う、しかも愛情をもって向い合う。いかにもうるわしそうなこの場面も、状況によっては、子どもに有無をいわせない圧力を感じさせる場になってしまふとわたしは語ってきました。建前としての学校や家庭、そして教師だから、親だからという押し付け。これは、わたしたちが心しないとすぐにでも出てくる恐ろしいわたしたち自身の姿です。

子どものころよく聞かされた越後の昔話があります。三枚のお札の話です。ご存知のかたも多いだろうと思います。あらずじをご紹介しましょう。

ある小僧さんが和尚さんにいつつけられて、山へ花を取りに行きます。花を取り取りだんだん山奥まで入ってしまいます。気がついてみるともうあたりは暗くなっています。どうしようと思っていると、向うのほうに明りが、てかんでかんと見えます。ああよかったと行ってみると、それはおにばばの家でした。小僧さんはおっかなくなりしましたが、逃げて帰るわけにはいきません。おにばばに抱かれて寝ることになります。おにばばは、この小僧さんが可愛くて、どこから食べようかと、なでまわします。

小僧さんはおっかなくなつて、便所へやってくれといえます。いや、ここにしろ、とおにばばにいわれませんが、ようやく紐をつけられて便所に行くことができました。すると便所の神様が、小僧さんに三枚の札をくれました。これを投げて逃げろというのです。そして、小僧の帰りが遅いのでいらいらしたおにばばが行ってみると、小僧は逃げていました。おにばばは追っかけます。

こらまで小僧。こらまで小僧と、足の速いおにばばは

もう小僧に追いつきそうです。小僧は思いきって札を一枚投げました。大山になれ。すると小僧とおにばばの間に大きな山ができました。おにばばはそれでも、山を越えて追いかけてきます。また、手がとどきそうになりました。小僧はもう一枚の札を投げます。大川になれ。

おにばばはその川も泳いでやってきます。またつかまりそうです。最後の一枚。大火事になれと、小僧さんはそれを投げました。ほんほん燃える火のなか、おにばばは追っかけてきます。小僧さんはようやくお寺につきました。和尚さん、和尚さん開けてといますが、和尚さんはなかなか出てきません。おう、いまふんどししめてなどといつて、ようやく小僧さんの中に入れてくれました。

ほっとしてやれ助かったと思うまもなく、おにばばがやってきます。そして、和尚さんが見事おにばばをやっつけてくれて、小僧さんは助かるのです。

この話を語ってくれたわたしの祖母はしみじみいうの

でした。「女は業が深いからなあ」と、祖母が、語りながら何を感じていたのか、今は知る由もありません。ただ、このおにばばに女としての自分の姿を映していたことだけは確かだろーと思えます。

可愛くて、可愛くて仕方がない自分の子ども。それこそ山を越えても、水を越えても、火のなかをくぐっても、追って行きたい。しかし、それはなんのためか。その子のためと思ったが、実は自分がその子を食べて自分の樂しみとしたいため。

そうしてみると三枚の札も意味深長です。投げるたびに、小僧さんとおにばばの間があく。子どもと母親の間には、どうしてもその「間」が必要なのでした。さきほどのジブラーンの詩でいえば、そこに天の風が吹く。母性愛の素晴らしさを人がいうならば、このお話はむしろ、その危険を語っている。間をあげるために、子どもが投げる三枚の札は、今というなら、登校拒否、家庭内暴力、自殺企図などの札とも見えます。

ここで、母親や女性の愛の恐ろしい側面を指摘するだ

けでは片手落ちだろうと思います。オニババの愛情は、誰にでもあるからです。自分の利益を求めて子どもを追い回す者は、みなこのそしりを免れません。教師も、研究者も、子どもをえさに儲けようとする者も、みなそうです。

間がもてなくなり、天の風が信じられなくなると、わたしたちはたちまちおにばばになり、子どもをえじきにしてしまいます。

このお話の最後の場面も、わたしたちに深く考えさせてくれます。慌てることもなく、ゆっくりゆっくり出てきて小僧を迎える和尚さん。その人が、しかもこの世の雑事を扱う人ではなく、寺にいて、人々の救いのために働く人だというのも、とても印象的です。

今から六〇年前、宮沢賢治は、育ってゆく若者に向けて一つの詩を書きました。その最後、彼はこう祈ります。

……雲からも風からも

透明な力が

そのこどもに

うつれ……

間をとりましょう。天の風を迎えましょう。子どもたちが幼いときから、わたしたち大人がその配慮を忘れないことです。きっと、大きな天の力が、わたしたちの思いをこえて、子どもたちの上に働いてくれます。

さて、わたしはまた、ふくろうのつぶやきを聴きに文庫の部屋へ行きます。こんどはなんといつているか。

(新潟大学医療短大)